

オルタナティブのためのコンティンジェンシー再考： 徹底的行動主義と文化心理学をつなぐもの

サトウタツヤ
(立命館大学)

サトウでございます。私は渡邊と大学院の同級生です。芳之とは違って、スライドがたくさんあり、たくさんしゃべることになりますが、よろしくお願いします。

心理学史における行動主義

心理学の中で行動主義がどう語られているかという、一つは、ヴントの心理学を乗り越えるという位置づけ、もう一つは、行動主義の背景として功利主義、機能主義がある。逆に言えば、思想としての功利主義や機能主義が心理学における行動主義の源流である、というような位置づけで語られることが多いです。僕は、後者はしっくりこないなあと感じています。

ワトソンの行動主義が当時の心理学に受け入れられた、という言説自体が、伝説みたいな神話みたいなものかもしれません。実際、その当時のアメリカ心理学会の会員は200名程度であったし、ワトソンは、よく知られているように、研究論文として残しているものは少なく、(学界から実業界に転じたこともあって)いわゆる行動主義宣言のほかは一般書に主に書いています。そして、一般書のスローガンもまた、大きなインパクトをもって受け入れられているのです。そこで、ワトソンの行動主義を理解するには、実際のワトソンの研究内容を知る必要があるだろうと考えています。

ワトソンの研究についてですが、ワトソンは、乳児の行動を徹底的に観察した人でした。おそらく乳児を組織的に観察した人の一人がワトソンでした。ワトソンは、観察しているうちに、刺激制御というやり方で実験として刺激を系統的・体系的に与えてみたらどうなるのかについて研究をはじめました。このときの理屈づけの基盤は、パブロフの条件づけでした。もっとも、ワトソンの言葉が心理学業界に受け入れられた理由としては、そう思っていた人がたくさんいたということの意味します。つまり、それまでなんか言いたくても言えなかったことをズバっと言ってくれる存在、それがワトソンだったと思います。

他方で、ワトソンの後に新行動主義と呼ばれる人たちが多数出てきたことによって、ワトソンの行動主義の意味が明確になり輝いた側面もあるだろうと思います。つまり新行動主義には本家が必要だったとし、行動主義には分家が必要だったと思います。行動主義は新行動主義によって（社会的に）構成された、と言えるのかもしれませんが。この新行動主義のうち、トールマンやハルについては、既に渡邊が言ったとおりです。今現在、心理学界で残っているのは、スキナーの行動主義だけです。

スキナーの意義というのは、行動記述を重視したと言うことと、行動の種類として、レスポナント(パブロフ型の条件付け：受け身型の条件付け)とオペラント(自発行動による条件付け)は違うのだと言ったことの二つです。スキナーは自らの方法を **Radical behaviorism** と言いました。この **Radical behaviorism** でスキナーは、内的要因を排除し、**Contingency** の重要性を強調しました。この **Contingency** は、非常に興味深い言葉で、今は「偶有性」と訳している人もいますし、慶應義塾大学名誉教授の佐藤方哉（まさや）先生は「縁」と訳すといいのではないかと書いていました（このことは最後にもまた扱います）。スキナーは、この **Contingency** を、A B C デザインと言われるように、先行子 (**Antecedents**) があって、行動 (**Behaviors**) があって、結果 (**Consequences**) がある、このような流れだと主張しました。ここには明らかに時間があります。時間を正當に扱う心理学というのはスキナーの徹底的行動主義ぐらいだと言うのは言い過ぎだとしても、時間を組み込んだ心理学の一つはここにあると言えるでしょう。

徹底的行動主義の3つの問題

ところが、この徹底的行動主義にも問題もあります。まず1つ目には方法論的行動主義と分離するのが難しいという問題です。つまり行動主義を研究するためには、方法論的行動主義を一部分でも取り入れなければならないという問題があります。また、2つ目には、研究者と研究対象者が分離してしまったという問題があります。**Subject** という言葉が被験者と訳されていますが、これは「超訳」です。**Subject** は、あくまで主体です。この言葉が用いられたのは、近代心理学つまり、ヴントによって集大成され哲学からの独立を目指した心理学では、研究対象者が実験に主体として関わり、実験者と被験者が相互に交代可能であったし認識としても分離されたものではなかったという背景があります。そのように、不可分だった研究者と研究対象者が行動主義によって分離してしまったということが2つ目の問題として挙げられると思います。

第3には、単子化、変数化という問題があります。前者は、研究対象をモナドのように、外界と交互作用しない単体としてみるという問題です。後者は、研究対象全体ではなく、

その変数だけが重要だと考える考え方です。ここでは、それぞれ細かく見ていきましょう。単子化の手法というのは、次の写真を見ていただくとわかります。この写真では、ハトが上の白い部分をつつくと、下の白い部分からエサが出てくる仕組みになっているわけです。さらにランプを付けてランプがついているときに上の白い部分をおすとエサが出てくる、というような仕掛けを作ることができます。ランプがついていないときにはエサは出てこないのです。この



ような実験を行う場合には、刺激制御だけではなく、個体制御も行っていることが一般的で、実験時にはハトの体重を 80%に抑えるというようにもやっています。また、ラットの研究では特定な血統のラットだけを対象に研究しています。制御できるものは制御してしまい、そこにおけるオペラント行動を見ていくということが、徹底的行動主義が抱えている方法論的行動主義的な側面の問題として認識される必要があるように思います。

ちなみに、余談ですが、研究対象について観察したい変数以外の変数を制御できない場合には、ランダムサンプリングしろと言われることになります。マクネマーという有名な統計学者は、社会心理学が洗練される前の 1940 年代に、社会心理学はサンプリングしない研究が多すぎると怒っていた。人間を扱うにはランダムサンプリングが必要だ、なぜなら「Because variation exists in human being (ヒューマンビーイングにはヴァリエーションがあるから)」とか言っていたのです。

前述の 3 つ目の問題の後者は、変数化の問題です。これは、数量化と渡邊が言ったことですが、ハトではなく、変数(variable)としてしかその個体をみていない。生体は変数の乗り物であって、変数の束である。変数としてのみ扱われている。これは徹底的行動主義に限ったことではなく、心理学全体における変数化の問題です。

ワトソンの行動主義の利点

これまで(徹底的)行動主義の問題を挙げましたが、ワトソンの行動主義には魅力もありました。その一つは、ヴントの心理学の閉塞感を打破したことです。私は、ヴントの心理学の閉塞感はかなりあったことがあると思います。たとえば感覚知覚領域の実験で、対象者の訓練が必要だ、というような風潮がでてくる。被験者歴 15 年の人の研究より良い

研究をするには、それより長く被験者をした人を対象にしないと研究できないと言われたら、若い人たちには到底太刀打ちできない。また、要素主義というのは本来的に細かい分析をしていくものなので、研究が進むと本当に細かいことを研究することになってしまわざるを得ない。そういう意味で、ヴントの心理学の閉塞感もかなりあったのだと思いますし、ワトソンの行動主義はそれを打破したのだと思います。

ワトソンの心理学が受け入れられたもう一つの理由として、これは単なる仮説ですが、進化論によって、動物と人間の関係が結びつけることができた、ということがあるでしょう。オリエンタリズムのように、動物ってこんなことできるんだってことを示す意味もあったのではないかと思います。

例えば下表の問いは、動物と心理学者の関係を問うクイズですが、このようなクイズをつくることは心理学ではすぐにできます。また、心理学に詳しい人なら以下のようなクイズに答えるのは簡単です。

問い 研究協力者と心理学者を結びつけなさい

・1 うま	・A ソーンダイク
・2 ねこ	・B パブロフ
・3 サル	・C ケーラー
・4 ラット	・D シュトゥンプ
・5 いぬ	・E スキナー
・6 ハト	・F トールマン
・7 ごきぶり	・G 南博
・8 トゲウオ	・H フリッシュ
・9 ハチ	・I テインバーゲン
・10 がん	・J ローレンツ

つまり、心理学者は、ある生物のいいところ、使えるところを持ってくるのがうまい。それをかっこよく言うと「反応のトポグラフィ」です。つまり、ハトであればつつくという行動ですし、ネズミでは（レバー）押す行動や（迷路を）走り回るといった行動だし、ウマであればうなずくという行動です。それらの行動をどのように上手く取ってきて実験計画に乗せるか、そこに工夫が必要であり心理学者の腕の見せ所なのです（クイズの正答は文末）。

徹底的行動主義内の問題のまとめ

スキナーの徹底的行動主義は、オペラント行動を対象にしている、行動は自発だと言っているけれども、矛盾はあります。このスキナー箱という特殊な空間の中で自発的な行動するとはどういうことなのかという問題です。つき行動のみを取り出す構造が、その空間にはあり、その空間の背後にはすごいメカニズムがあるわけです。

私は、スキナー箱の裏側のメカニズムをみると、ゲーテによるニュートン批判を思い出します。ゲーテは、プリズムを用いて分光実験をしたニュートンに「もし太陽の光を理解したいと思うならば、部屋を暗くし、狭い穴から光を搾り取るようなことはやめるべきだ。光というのは外にあるものだからその通りに観察すべきである」と批判しました。これを人間行動の研究にあてはめると、「もし人間行動を理解したいと思うならば、箱を作り、しかもハトを入れるようなことはやめるべきだ。広い環境の元に出て人間の行動を自然に現れるままに観察すべきである。」と言い換えることができるのかもしれませんが。ただしこれはロマン主義的な科学観に基づいていますので、拒否反応も強いかもしれません。

徹底的行動主義に問題があったとすれば、実験者が刺激制御のすべてを取り仕切っており、個体を個体として全く尊重せず、外界と相互交渉するものとして見ず、単なる変数を取り出すものとして見ていたことが挙げられます。

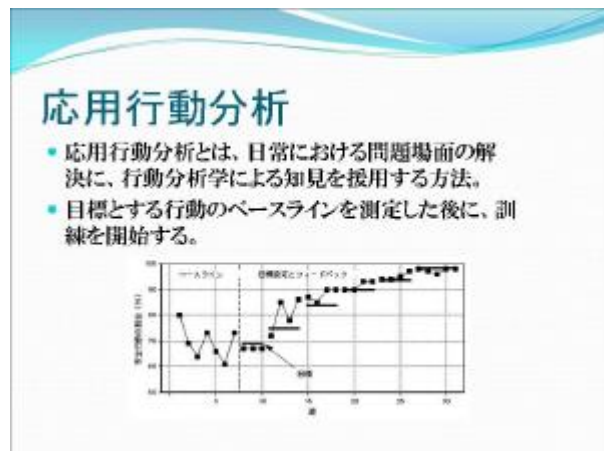
行動主義以外の心理学の可能性

では行動主義以外にどのような可能性は何があるのか。企画者の要望としてオルタナティブを提示することがありましたので、考えてみました。

1つは、応用行動分析で、もう一つが文化心理学です。

応用行動分析

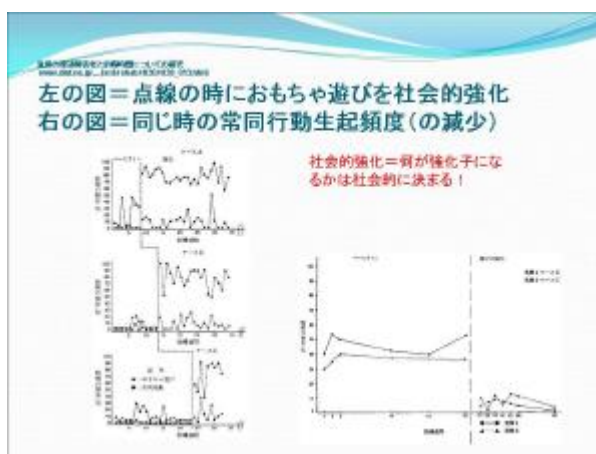
まず応用行動分析ですが、これはスキナーの徹底的行動主義から派生したものです。その一部と言ってもいいものです。いわゆる問題行動があったときに、問題行動をなくして好ましい行動を増やすことを正の強化子の呈示という方法で目指すものです。これは会社の経営でも、教育場面でも適用できるのですが、一番使われているのは重度障害者の方を



対象にしたものです。最近では特別支援学級などのフィールドです。言葉による介入ができない方に、ある種の行動獲得をしてもらう時の支援方法を正の強化に基づいて行っていくのです。まず生起を増やしたいと思うターゲットとなる行動を定め、その行動の生起の仕方を見ておきます（ベースライン期）、その後にある種の介入をして、何が強化子として働くのかを確認しながら、好ましい行動を増やしていくものです。あえてこの方法の問題点をあげるなら、何が良い行動なのかという価値が定められていないとできないこと、つまり、ある行動が好ましい行動かどうかが決まってないとやりにくいという問題があります。他方で、この方法の魅力は、実験者が何か刺激を与えて、何かを測定するという単純なものではなく、ましてや行動の制御とコントロールができたといって満足するにとどまらず、様々な現場における様々な人間行動を対象にして、個人の行動レパートリーや選択肢を豊富にできる点です。

具体的にどのようなものかについて、常同行動が出てしまっている自閉症のお子さんを例にお話します。おもちゃ遊びをまったくしない3人のお子さんがいたとします。この3

人のお子さんのおもちゃ遊びに対して、右図の点線のところで、強化を与えるとおもちゃ遊びが増えることをこの図は示しています。その変化がたまたまではないことを示すために、この図では、介入時期を変えています。この結果から介入によって常同行動は減っているといえます。このグラフと次のグラフは Wehman の「重度の発達障害者と余暇時間についての研究」からとってきたものです（下記アドレス参照）。



http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r030/r030_013.html

強化というと非常に単純で固定化した見方をする人が多いのですが、応用行動分析で大事なものは、社会的強化という概念です。強化は、食べ物など特定のものにすればいいという考え方がありますが、これは全くの誤解です。社会的な関係性の維持に関する強化、社会的強化というものがあります。そもそも、食べ物のようなものでさえ、それがどのように与えられるかによってその機能は異なるのです。それぞれの現場において有効な強化子があるし、あるべきだし、見つけるべきであると思います。

実際に、強化子が不適切だと問題がおきます。たとえば、強化矛盾という不思議な概念があります。勉強している子にお金を与えると、お小遣い目当ての勉強しなくなり

しまうのです。お金もらえないなら勉強やめちゃおっと！ということになるわけです。この場合、この子にとってはお金が強化子として働いていないわけです。つまり、お金は大人にとっては強化子となりますが、子どもにとって、ご褒美とはそういうものではない。子どもにとって強化子とは、問題を解けるということやわかったという実感であったり、お母さんが「えらいね」っていつてくれることであったりすることなのです。それを大人が勝手に「ご褒美はお金」というように特定のものにせばめて考えてしまうと、強化矛盾を引き起こしてしまいます。

つまり応用行動分析とは、ある種の随伴性のシーケンス(連続性)のなかで、強化できることを見つけて、望ましいことを増やしていくものだと言えます。これは、人間を檻に閉じ込めるものでもなく、狭い因果関係に閉じこめるものでもないので、意味があるだろうと思っています。

ただし、先に申し上げたとおり、実際にどのような行動をターゲットにするのか、ということは、非常に価値エンベッド(embedded)と言いますか、価値の問題と絡んでいる難しい問題になります。たとえば、朝食を作る行動を獲得してもらおうとするときに、それが一種のしつけみたいにみえてしまって、抵抗を感じる人がいます。朝食を作ることが良い行動なのか？作れなくてもいいではないか、朝食が作れない人生をそのまま支えることもあっていいのではないか、という主張をする方がいることも事実です。しかし、私自身は、朝食を作れた方がいいという主張に与しています。なぜかというと、朝食が作れると寝坊ができる。寝坊ができるのは大事なことで、朝食が作れないと(いくら丸ごと支えると言う人がいたとしても)結局は人の言いなりになってしまうからです(労働者の権利だから時間外労働はできない、だから定刻に朝食を食べろ、ということを言われたりするおそれがないとも言えません)。食事が作れないのをありのまま受け入れようという人たちは決まったスケジュール(たとえば9時-5時)で働いていたりするので、食事の時間が限られてしまう。寝坊したら食べられないし、寝坊の自由が失われる。ですから、私は、食事の支度のような基本的なことは自分でできるようになった方がいいと思うわけです。朝食作りという行動レパートリーが増えることで、寝坊するという選択肢が増える。立命館大学の望月昭教授はこういうことが生活の質(QOL)の増大だと述べていますが、私も賛同します。

以上をひっくるめて、応用行動分析は、行動分析の派生物としては、非常に面白いものであるし、もっと検討すべき問題だと思います。

文化心理学

他方、私は、もう一つのオルタナティブとして、文化心理学を挙げます。文化心理学は決して新しい考え方ではありません。ただ、みなさんが普通に文化心理学と言うと、国や地域を比較するような心理学、つまり比較文化心理学（Cross-cultural psychology）のイメージが強くなるでしょうけれども、私が以下で述べる文化心理学は比較文化心理学とは少し違います。

ウィルヘルム・ヴントが心理学を近代的な装いで統合した際に、彼は2つの心理学が必要だと言いました。その一つが生理心理学で、実験という方法を重視して、時空を限定しない抽象的な心を検討しました。その中で、特に感覚が注目されました。感覚は世界とのインターフェースであり、一番プリミティブなので、まず取り組むべき研究だと考えられたわけです。また、感覚生理学の分野と接点があるので、生理学が蓄積してきた実験方法を援用できるというメリットも存在しました。

そして、ヴントが必要だといったもう一つの心理学は、民族心理学です。ヴントは、制度・文化・法律などについて理解をすることで、心を知ろうとし、それに民族心理学という言葉をあてました。方法としては（実験に対して）、民族誌、民俗学および言語学のような記述的な方法がふさわしいと考えていました。

ヴントが二つ目の心理学に民族と言う言葉をあてた理由を考えるためには当時の時代風潮を無視するわけにはいきません。

近代心理学が成立したのは1879年だと言われていますが、ドイツ帝国が統一国家として成立したのは1871年であり、ほぼ同時と言ってもいいくらいです。19世紀の末のドイツにおいては民族意識が非常に高揚していた時代だったこともあって、ヴントはそのとき民族心理学と言ったのだらうと思います。ヴントの民族心理学の中で私が共感することの一つは、法律というものに人間の精神が一番良く現れているといったところです。法律は人間が作ったものでありながら、人間の行動を規制します。このように、人間が作ったものによって人間が理解できると考えるのが文化心理学です。民族心理学はドイツ語でVölkerpsychologieです。ドイツ語の「Völker」について、英語圏では長らく「Race」を訳語にしてきましたが、最近では「Culture」を当てるようになってきています。マイケル・コールの『文化心理学』などを読むと大変参考になると思います。

文化心理学と応用行動分析／行動主義の射程の違い

文化心理学と応用行動分析が違うのは、文化心理学では、人間が主体的に作り出す産物が人間の行動を変えてしまう側面を扱うことができる点です。たとえば、私は今日、新幹

線で京都から名古屋まで来たのですが、新幹線ができることによって、私たちの行動や意識は変わるわけです。速く移動するために新幹線を作る。ある所に「速く移動する」ということを目標にして何かを作ろうとする人たちがいたわけです。そして、それがある時に実現すると、その実現した技術によって私たちの行動や意識は変容していきます。文化心理学では、記号とか媒介という概念を重要視していて、単なる刺激ではなく、人は記号によって、行動を主体的に選択すると考えます。たとえば先ほど、「速く移動する」ということを目標にして」と述べましたが、「人が速く移動する世界の実現」という考え方が一種の記号として働くので、人々は、新幹線などを作ろうとする、というような理解になります。記号と媒介を重視する文化心理学は、媒介項を考えるべきだと考えたヴィゴツキーの心理学に遡ることができます。

スキナーの行動主義（Radical behaviorism=徹底的行動主義）は、ワトソンの古典的行動主義とは明らかに異なり、レスポナント行動（受動的行動）ではなくオペラント行動を見ようとしてきました。オペラントというのは機能性をもった行動という意味だと思います。あるいは作用する行動（何かに働きかける行動）と言えるのかもしれませんが、つまり、主体が環境に働きかけるということを含意している概念なのですが、研究のあり方としては、オペラント行動について扱う時に、生体の自由を制限することで見ようとしてきました。既に述べたように、いわゆるスキナー箱においては刺激を制御することが重視されているのです。刺激を制御するのは実験者ですから、オペラント行動の一側面しか見ることができないように思います。それはそれでいいのですが、文化心理学は、生体の自由を制限せずに、生活の場面における記号の発生を見ようと考えています。

徹底的行動主義に基づく研究プログラムにも方法的行動主義のあり方が潜んでおり（いくら徹底的行動主義は方法論的行動主義と違うと言っても！）、それは対象を均質化してしまっているということだと思います。たとえば、ハトの体重を実験前に一定にしたり、ラットの特定の血統だけに対象をしぼって研究をおこなっています。しかし、人間は文化による豊穡な統制を受けているとクラーク大学のヴァルシナー教授は言っています。彼は、人間というのは、Redundant（冗長）なものであると主張しているわけです。例えば、私たちが今いるこの空間にも、非常にたくさんの刺激があるわけです。椅子もあるし、研究会という状況もあるからこうやってしゃべっているわけです。もしかしたら今、私の持っているコップの中はビールかも知れませんが、この状況で優勢な記号（研究会ではアルコールは供さない、など）があるために、だれもこの中がビールだとは思わないのだと思います。

文化心理学の方法としてのエスノグラフィ

冗長なコントロールを前提にして、分厚い生(Thick living)を記述するには、エスノグラフィという方法がありえるでしょう。エスノグラフィは、異文化の研究をすると思われがちですが、そうではありません。エスノグラフィは科学ではないと思われるかも知れませんが、「記号による媒介によって私たちは生きている、だからその記号のメカニズムについて読み解いていく」というレベルで普遍性を求めるようなことをすれば、典型的な実験科学ではないとしても、*wissenschaft*(学問)として成り立っていくだろうと思います。科学の語源は「知ること」だということを強調しておいてもいいでしょう。

エスノグラフィと記号の記述を組み合わせる文化心理学が必要になってくるだろうと私は思っています。実生活の中でも、記号が思考をガイドしていることを見ることができません。たとえばトイレのマークは、「これはトイレですよ」ということと、「これに従うといいことありますよ」という2つのことを含んでいます。女性トイレというマークに男性が従わないで入っていくと罰せられたりもします。

トイレのマークは明示的な記号が人間に対して作用する例ですが、そうではなく、「非」明示的な記号が「非」意識的な思考をガイドする例もあります。たとえば、ある男子トイレの中で5つの小便器があるとします。5個あるからどこにでも行けるはずなのですが、実際にはそれほど自由に振る舞えるわけではなくて、



どこを使うかはかなり偏在しています。あるHPによれば、実際に観察をすると1番奥の小便器の使用頻度が最も高く、次は奥から四番目だそうです。これが単純にオペラント条件付けだったら、どこ行っても用を足せるのだからどこに行ってもいいはずですが、トイレで用を足すというのはそれだけではない。この場には記号が発生していて、トイレに行ったときに、まず一番奥に行こうという記号が発生しており、一番奥に行きがちとなる(習慣と言ってもいい)。そうすると、一番奥に誰かがいる場合というのが多い訳ですから、その次に来た人は、すぐ隣の2番目で用を足すということにはなりにくく、どうしても、奥から4番目に入らざるを得ないなあ、となってしまう。それは、ある人が記号に従った状況(人が一人一番奥にいる)が記号として作動し、そのことが次に来る人の行動をガイドするのです。こういう状況を書いていくのがエスノグラフィです。

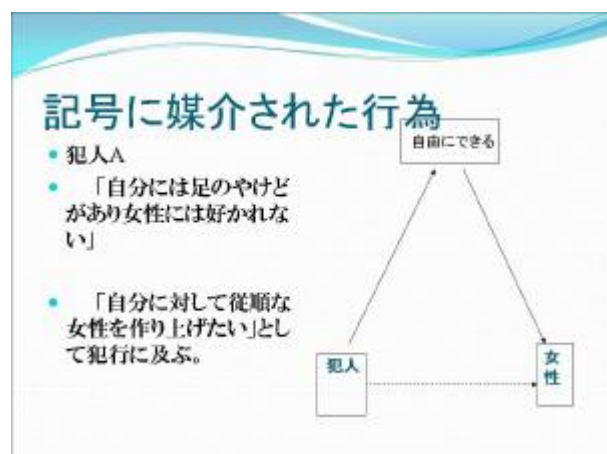
記号は私たちの行動を制約することもあります。もう一つ例を出すと、私たち日本人は

「デビットカード」を使う人が少ないです。何で銀行のキャッシュカードで支払いをする必要があるのか？良く理解ができないのです。電子マネーを使うほうがしっくりくるので、イコカとかスイカとかは割と普及している。電子マネーが無くなるといちいちチャージしなければいけないのですから、その意味で銀行の口座からそのままお金が動くデビットカードの方が楽だと思のですが、電子マネーの方が普及しているのが今の日本の現状です。このことにも実は文化的歴史的な背景があります。つまり、欧米では小切手を使う文化があるので、銀行口座から直接支払うという意味でデビットカードが発達してきた。それに対して日本では「いつもニコニコ現金払い」「月賦（クレジットという言葉が一般になる前は月賦と言ってました）は貧乏くさい」という文化があり、現金支払いを尊ぶ文化が根づいていると言えるのです。こういうことを明確に意識してデビットカードは使わない、と言う人はいないのですが、現実にはこうした行動を制御するシステムがあります。それを記号であり文化だと考えるなら、エスノグラフィはまさに文化を記述する方法ということになります。

今、私の研究室の学生たちは、さまざまなエスノグラフィにチャレンジしています。「ペットよけペットボトルの考察」「自転車のベルならし」「電車内での化粧行動」「銭湯における行動」などここに見ていくとおもしろいのですが、時間がないので、割愛します。

記号で考えることの意義

行動の生起メカニズムを記号で考えることは応用的な価値も持っています。この図は、隣にすむ女性を拉致監禁して殺害に至ってしまった事件の構造を示したものです。こういう事件が起こると、「あいつは鬼畜だから理解できない」から排除しようという話になることが多いのですが、なぜこんな事件を起こしてしまったのかを考える必要があります。思考停止や異物化は単純な結論を導きます。



この人は、自分にやけどがあって、女性には好かれたい、そして、女性なんかと付き合い必要などないと思っていました。そして、マンガとか AV とかだけをみていて、ある種の勝手な思いこみを作りあげることになっていたようです。そこで彼が接したのは従順な女性像です。生身の人間を人間が襲ってはいけないとか、そういうことをすると声を上げ

られる可能性があるとか、包丁を持っていったらイヤだと言われるというのはマンガなどにはほとんど書かれていないので、女性は自由になるものだと理解してしまったようです。全く勝手な思いこみですが、彼にとっての女性とは「自由にできる」という記号に媒介された存在だったわけです。

そうこうするうちに、女性と縁がなくてもいいや、と思っていたのに、やはり女性とおつきあいがしたいと思い出す。そのとき、彼にとって女性とは「自由にできる」「従順」という記号に媒介された存在でしかないから、とにかく襲ってしまえばうまくいくと考えてしまった。あながち無茶な計画だとは思えなかったのです。

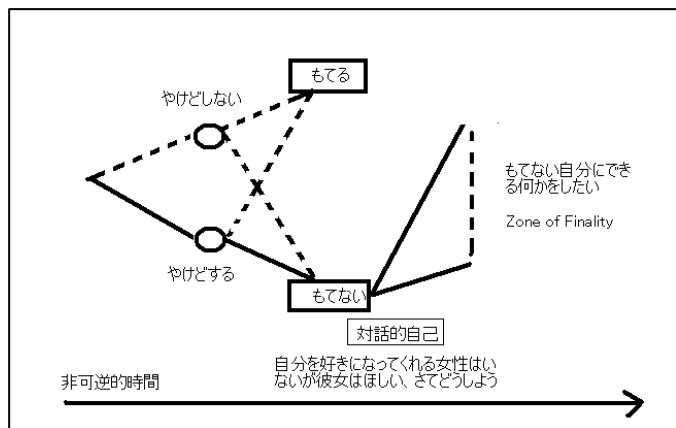
ところが実際にやってみたら、声を上げられた。だから殺してしまったっていう話だと思います。この例の場合、この人は、女性に向き合っていなかったからこそ、誤った記号を媒介にして行動してしまっているといえます。こうした単純な記号の発生を防ぐにはどうすればいいか、考えていくべきではないでしょうか。

加害者の理解よりも被害者の被害回復、ご遺族へのケアが大事だという意見は絶対的に正しいですが、未来の被害を防ぐという観点からすると、犯人の立場にたった分析も大事なのではないかと思います。

代替選択肢を示すことの意義

さて、今回の犯人は、やけどをしたからもてないと思っていたらしいですが、やけどをしなくてももてない人はたくさんいますし、やけどしたってもてる人だっているのです。しかし彼の場合にはそういうことに考えが及ばなかったわけです。

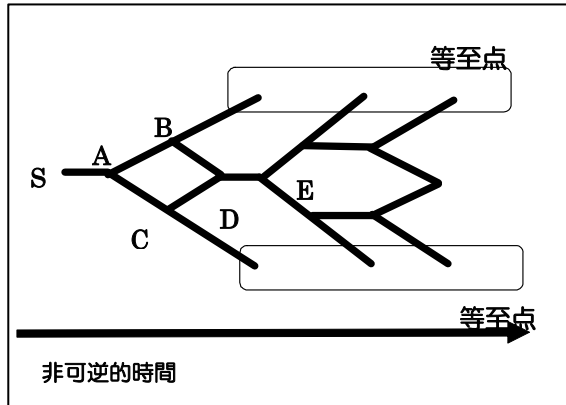
自分はもてない。これが前提。
自分がもてない以上は、マンガに書いていたように監禁してしまえ



ばこっちのものだとなってしまう。本来なら、やけどしてない人だっていると努力しているんだから、おまえも努力しろよ、という話ですが、そういうことには全く思い至らず、非常に単純な記号（やけどしたからもてない、女性は自由にしている）によって突き動かされている。ところが、「もてる」とか「もてない」とか、そういう状態に至る径路は一つしかないわけではない。上の図のような複線径路を描くことが大事だと思います。そもそも、一つの目標（目的）に複数の径路が存在するのが、開放システムの特徴だ

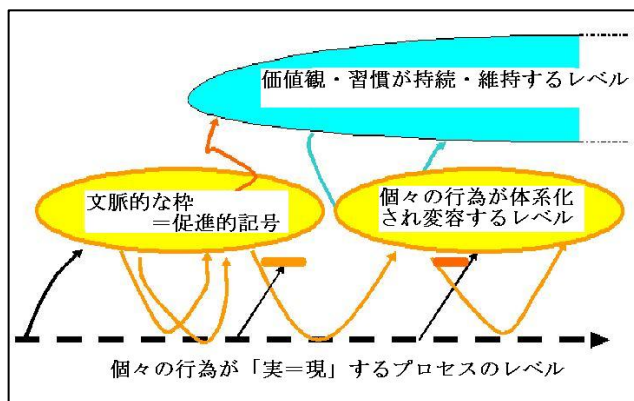
とベルタランフィは言っています。この目標のことを等至点 (Equifinality)と呼びます。

等至点までの複線径路を描く手法を私たちは複線径路・等至性モデル (Trajectory and Equifinality Model ; TEM=テム) と呼んでいます。これは、Life(人生・生活・命)の径路を複線で表し、一つのゴールに対して複数の道を選ぶことがあるということを示すものです。質的研究であり、文化心理学であるような研究方法論です。また、記号の発生や周囲からの圧力によって、本来存在すべき選択肢が隠されて、径路が一方向にしかいかなことを暴いて他の選択肢を明らかにする研究方法でもあります。つまり、良く言えば、社会を安定させている仕組み、悪く言えば、何かが行動の自由を妨げているという様相を描くことができるのです。これも研究例が蓄積されつつあって、「未婚の若年



女性の中絶経験」とか「普通の結婚をするということ」とかをテーマにやっています。詳しくはサトウタツヤ (編著)『TEMではじめる質的研究 時間とプロセスを扱う研究をめざして』(誠信書房刊)をご覧ください。

先ほどから記号によって行動が起きていることを考えることが面白いということや、行動が一方向だけにガイドされると問題が起きやすいので、その代替選択肢を示すことが大事だということを述べてきました。単純な因果関係にとらわれた思考が、普通の人の生活にしみこんでいるとしたら問題で、またそれを心理学が強化しているのだったらさらに問題だと思います。その意味で、価値観や記号の発生メカニズムそのものも考えていく必要があるでしょう。発生や変容のメカニズムをどのように描くのか、それもまた文化心理学の課題であるように思います。現在、私たちは発生の三層モデル (Three Layers Models of Genesis=TLMG) と呼んでいます。



最上層は個体発生のレベルであり、長い間にわたって形成されてきた価値観のようなものが含まれます。最下層の点線のレベルはマイクロジェネシス (微視発生) のレベルであり、日々の行動や実践です。その状況によって引き起こされたり、いくつかの選択肢の中から選ぶ行動ですが、基本的に最上

層の価値観のレベルの影響を受けることはあっても、いきなり価値観をひっくり返すような影響力はもちません。では価値観がひっくり返るようなことはどのように発生すると考えるのか。中間の層がカギとなります。メゾジェネシス（中位発生）のレベルにおいてこそ、記号が新たに発生し、行動をガイドするだけでなく個体発生のレベルの変容を媒介すると考えるのです。図には「促進的記号」と書いてありますが、何かを促進し、最上位である個体発生のレベルに影響しようとするのが中位発生における促進的記号の役割です。

ここで重要なのは **Contingency** という概念です。人間の生活においては、決して単純な因果関係だけが支配することはありません。たまたま出会った人に影響を受ける、というようなことは良くあることです。一方で運命の出会いという言い方もあります。つまり、偶然と必然とは隣り合わせの概念であり、それこそが **Contingency** という概念が伝えていることなのです。様々な「たまたま起きた出来事」の多くのことを微視発生のレベルでやり過ごし、個体発生のレベルの価値観を維持しているのが私たちの日々の生活です。しかし、その「たまたまの出来事」が個人の感情をゆさぶったり価値観を変えることがありえるわけです。それこそが中位発生のレベルにおける記号の発生だと考えられます。

三層で記号の発生を考え、ひとつの道に至るにも複数の経路があると考え、等至点（目標）があつたら常にその補集合を考えること、そして、対象を選ぶ時にはランダムサンプリングではなく同じ経験をした方を対象にすること、こうした全体的な研究法が今、文化心理学に必要とされています。サンプリング法としての歴史的構造化サンプリング（**Historical Structured Sampling; HSS**）、経験の質的記述法としての複線径路・等至性モデル（**TEM**）、発生や変容のメカニズムを理解するための発生の三層モデル（**TLMG**）という道具立てこそ、私たちが提案する包括的な研究法です。

まとめ

本来、時間であるとか、環境の変化と生体の関係を描ける有力なツールの一つは徹底的行動主義だと思います。しかし、その成果が実生活における私たちの生活を記述したり説明するには迂遠な感じがしています。ですから、発想を転換して、比較的自由を確保するなら、特に、ロマン主義的科学観にもとづいてやるなら、記号の発生に注目した質的研究には大いなる可能性があると思います。

また、非常に重要な概念として、**Contingency** について再考する必要があるはず。最近、脳科学などを中心に、**Contingency** を偶有性と訳す動向があります。また、社会学には「**Double contingency**」という問題系があり、それは二重の偶発性と訳されています。統計用語では、説明変数と被説明変数のマトリックスのことを「**Contingency table**」と言

いますがこれには訳語がなく、カタカナ書きされることが多いようです。心理学では行動主義の影響で「随伴性」と訳すことになっていますが、「偶然」という意味も入れたかったと語っておられた老先生もいました。現在、私自身は、**Contingency** という考え方に一番フィットするのは「縁起」という語なのではないかと考えているところです。

コンティンジェンシーを人と環境の関係だけで見るのではなく、人と人との関係に適用するなら、(二重の偶発性という概念が示すとおり) 非常に問題は複雑になります。

こうした問題に立ち向かえるのは、応用行動分析と文化心理学なのではないか、その意味で両者は心理学にとってオルタナティブになりうる、ということを再度指摘させていただいてお話を終えたいと思います。

付記

20 ページのクイズの正答

1-D

2-A

3-C

4-F

5-B

6-E

7-G

8-I

9-J

10-H

